

SPECIAL EDITION

#### り う高齢者施設における シ高齢者施設における 利用者に寄り添う

近年、介護現場では"利用者の自立支援"や "介護者の負担の軽減"に役立つ介護ロボットや ICT\*1の活用が進みつつあります。

本特集では、高齢者施設での介護ロボット・ICTの活用事例やインタビューを交えて、介護現場の生産性向上や働きやすい職場環境づくりと、目指すべき利用者の自立支援、ケアの質の向上について考えます。

※1 ICT:「Information and Communication Technology」の略称。「情報通信技術」と訳されます。

写真上から

「笑顔で過ごす高齢者と介護職員」「移乗用の電動介護リフトを使用する様子」 (上の2点:特別養護老人ホーム常寿園)

「コミュニケーションロボット」「スタンディングリフトによる移乗支援 (排泄ケアの場面)」 (下の2点:特別養護老人ホーム万寿の家)









#### 丁導入の動向

## 2040年を見据えた介護現場の革新

は5978万人に減る見通しです。 2025年の7170万人から2040年 が35・3%とピークを迎えます。 75歳以上となり、 我が国では、2025年に団塊の世代 の進行で15~ 2040年には高齢化 64歳の生産年 また、 齢人口は

2040年を見据えた介護ロボットやICT の活用を促し、介護現場の革新を進めています 産性の向上は極めて重要です。 供を担う人材の確保はもちろん、 増大する介護ニーズに対し、 介護人材の確保を引き続き目指しつつ、 tt 厚生労働 現場の ·ビス提 生

#### 介護ロボットとその導入状況

の負担の軽減に役立つ介護機器」 技術が応用され、 情報の感知、 介護現場で導入が進む介護ロボットとは 判断 利用者の自立支援や介護者 動作といった のことを言 「ロボット

【図表1】

介護ロボット(-

(厚生労働省・経済産業省資料より抜粋)

移垂支援

装着型パワーアシスト

非装着型離床アシスト

入浴支援

入浴アシストキャリ・

見守り

-例)

います。

護業務支援」の6分野で開発が進み、 を想定した「移乗支援」「移動支援」「排泄支援 「見守り・コミュニケーション」、「入浴支援」「介 具体的には、 排泄、 入浴、 食事などの場

れています。 の介護記録システムなどではICTが応用さ に関連する見守りセンサーや このうち「見守り・コミュニケーション. 「介護業務支援

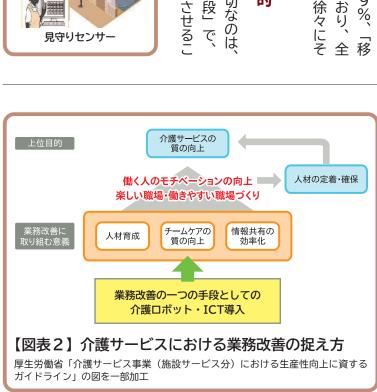
ると、 施した の導入が進んでいます。 体としては少ないながらも、各地で徐々にそ 乗介助 最も多く、次いで「入浴支援」5・9%、 |見守り・コミュニケーション」が16・6%と また、 入所施設での介護ロボットの導入は (装着型)」5・3%となっており、 「令和2年度介護労働実態調査」 ( 公財) 介護労働安定センタ によ が 実

### 介護ロボット・ICT導入の目的

業務改善や効率化で介護の質を向上させるこ 介護ロボットやICTの導入は 介護現場の生産性を高める上で大切なのは 「手段」 で

導入され始めています(図表1)。

質と言えます 目指すことが介護ロボッ 常生活動作) 機会を確保しながら、 この好循環で、尊厳を保持して活動 やQOL 「介護サー (図表2) (生活の質) ŀ 利用者のADL ビスの質の向上」 ICT導入の本 の維持 参加 を



とこそが

一目的」

だという視点です。

げることも大切です。

づくりを進め、介護人材の定着・確保へつな

トやICTを上手く活用し、

働きやすい職場

他のケアや利用者とのコミュニケーションに 介護ロボットを活用して生み出した時間をご

充てることも期待できます。 また、介護ロボッ

#### Ť -活用事 コボット 例

#### 社会福祉法人常寿会 特別養護老人ホーム常寿園

ました。 効果や今後の方向性について、 の長谷川 業務負担の軽減に取り組んでいます。導入の ICTを導入し、 常寿園では、約7年前から介護ロボット・ 均氏に、 適切なケアの提供と職員の 取り組みを紹介して頂き 理事で施設長

## ①移乗介助「床走行式電動介護リフト」

も高まっています。 乗に伴うケガのリスクも軽減でき、 げるケアが減り、職員の心身の負担感を軽減 できました。また、 アの提供と負担軽減を図ろうと考えました。 ています。そのため、ユニットの担当職員が 者が小規模なユニット(グループ)で生活し 介護リフトを導入した平成26年以降は抱え上 人でケアをする場面が多く、より安全なケ 地域密着型特別養護老人ホームでは、 利用者の皮膚剥離など移 介護の質

# ②見守り「眠りSCAN」と「低床電動ベッド」

ベッドのマットレスの下に敷いて、 型)の全97床に導入した「眠りSCAN」は、 平成30年に2つの特養(地域密着型と広域 呼吸、 心拍など)を検出し、 体 動 睡眠状態



職員が携帯するスマートフォン と連動する「眠りSCAN

睡眠、 タイムに分かり、状況に応じてアラームが鳴 などで迅速に状態を確認できます。 るため、 を測る見守り支援ロボットです。 職員はタブレットやスマートフォン 起きあがり、離床などがリアル センサーで

の確保にもつながりました。 担も軽減でき、また、巡回で利用者の安眠を 妨げることも避けられ、利用者の良質な睡眠 これにより、 夜勤に入る職員の精神的な負

げて介護する必要もなくなり、腰痛予防に効 応じて自在に高さを調整でき、利用者の転倒 が数値で表示され、 の画面には、背もたれの角度やベッドの高さ 果を発揮しました。なお、操作するリモコン 転落のリスクを減らせる上、利用者を抱き上 電動ベッド」を採用しました。ケアの場面に 質の高いケアを提供したいです。 ぐなど、より良いケアプランとそれに基づく たり、体調変化を早期に把握して重症化を防 などのデータに基づき、日中活動を充実させ また、 利用者一人一人の睡眠・覚醒リズムや心拍 統 眠りSCANの導入と同時に 一化されたケアも実現しています。 個々の職員の感覚に頼ら 「低床

### ③介護業務支援「介護記録ソフト」

録を転記していました。さらに看護日誌や介 さらに利用者のケース記録へと二重三重に記 る以前は、職員が手書きのメモから一覧表へ、 護日誌の記録の重複も生じていました。 ICTを活用した介護記録ソフトを導入す

ています。 ました。その他、コロナ禍ではICTを活用 解消。居室や食堂など、 で利用者や施設の行事の様子を家族に配信し したオンライン面談を可能にしたり、SNS レット端末から入力ができるため、 度の入力で情報が共有され、重複のムダも これを改善しようとソフトを導入したところ、 記録が瞬時に共有できるようになり 利用者のそばでタブ 記録忘れ

アを目指そうと考えています。 めに、インカムを導入してより良いチー したり、眠りSCANとの連動性を高めるた 今後は、複数の職員の重複した動きを解消



ニケーションを取りながら、

#### テクノロジーを活用し 介護現場の近未来

ンタビューしました。 護現場はどのように変化するのか、 先端の実践に取り組む県社会福祉事業団にイ 介護ロボット・ICTの活用で、 今後、 県内で最

特別養護老人ホーム万寿の家 社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団 次長兼支援課 課長/作業療法士 野上 雅子氏 (神戸市北区)

### 介護ロボットと高齢者の自立支援

事故も確実に減らせます。 果を発揮します。また、介護場面でのケガや の福祉用具や施設環境の整備と組み合わせて 護の重要な視点です。介護ロボットは、 できる「自立支援」を目指すこと、これが介 自立支援を目指すケアの選択肢を増やし、 高齢者が本来持っている心身の能力を発揮

ています。 割を担う「ロボットケアマスター」を育成し 祉のまちづくり研究所」と連携し、指導的役 や行政、大学などと研究・研修を進める「福 る人材の育成が大切です。 把握し、介護ロボットを安全かつ適切に扱え 将来を見据えると、利用者の状態を適切に 当施設では、

## 介護現場における科学的データの活用

令和3年4月から、厚生労働省が「LIFE」

専門性を発揮してケアを提供する介護職員

や利用者の状態などのデータを提出し、 組みです。 齢者の自立支援と重度化防止につなげる取り 的に分析されたフィードバックを受けて、 これは、 (科学的介護情報システム)の運用を始めました。 施設から厚生労働省へ介護サービス

により、例えば褥瘡の改善やオムツ外しなど、 個々の利用者に合わせたケアを「計画→実行 るでしょう。また、科学的・客観的なデータ 護現場に期待されます。 →評価→改善」のサイクルで進めることが介 れた介護ロボット・ICTの活用が求められ 今後は、「LIFE」との連動を視野に入

## 員のやりがいの創出とイメージの転換

思います。 ることが可能となるでしょう。今後は、多様 担は確実に減少します。腰痛を原因とする離 ア(持ち上げない介護)の推進で、身体的負 な世代の職員がいきいきと働く現場になると 職も減り、高齢になっても介護業務に従事す 介護ロボットの活用やノーリフティングケ

けられる職場をつくることが重要です。 の質も高まります。業務改善・効率化で職員 支援などに時間を充てられ、利用者の暮らし 時間が増えます。コミュニケーションをとり を少なくするのではなく、適切な配置で介護 信頼関係を構築し、レクリエーションや外出 また、業務改善が進むと利用者と向き合う 職員がやりがいをもって働き続

> 活用で、介護職のイメージの転換が図られ の確保につながることを期待しています。 ブにケアの仕事をしたい」という多様な人材 を活用したケアをしてみたい」「クリエイティ 介護の仕事の魅力も高まり、「テクノロジー の姿は魅力的です。介護ロボット・ICTの

# 介護ロボット・ICTのさらなる活用に向けて

の革新を後押ししています。 支援などに取り組むことを明記し、 ③介護ロボット等を活用する介護職員の育成 設の育成、②介護ロボット・ICTの導入助成・ 第8期介護保険事業支援計画で、 に活用される時代が到来しています。県では、 介護ロボット・ICTのテクノロジーが有効 高齢者の自立支援とケアの質の向上に向けて ①モデル施

に扱う技術を高めようと、 たに開発され、日々進歩する介護ロボット ICTの動向を把握しながら、 介護の現場。より質の高いケアを目指し、 テクノロジーの発展とともに変革期にある たゆまぬ努力が続 安全かつ適切



ケアの技術を高める職員研修 (特別養護老人ホーム万寿の家)